

# 漢文教育の意義に関する一考察 —漢語の構成からはじめる漢文訓読指導の実践を通じて—

言語文化系教育サブプログラム 国語

鹿島 脩太

【指導教員】 戸田 功 本橋 幸康 山本 良

【キーワード】 言語文化 古典教育 漢文教育 漢語 漢文訓読

## 1. はじめに

近年、古典<sup>註1</sup>教育の意義や価値への問い直しが数多く行われている。そして議論の中には「学ぶ意義は無い」「不要である」という主張が多く見られる。

また、そのような風潮は、「古典は本当に必要なのか」というような名前がつく書籍が出版され、シンポジウムが開催されていることから伺うことができる。

その中でも、さらに漢文教育はすでに崖の際に立たされていると言っても過言では無い。

それは、大学入試において多くの大学が国語科の独自試験問題の中に漢文教材を扱っていないことから推して知るべきだろう。また、古田島(2022)は現代の漢文教育の状況について以下のように述べている。

戦後、漢文教育が衰退の一途をたどり、今や文字通り惨状を呈していることは誰の目にも明らかであろう。いや、「誰の目にも」はいささか適切さを欠く言い方かもしれない。漢文教育に関心を寄せ、その来し方行く末に目を凝らしている向きなぞ、ほぼ皆無に等しいからである。国語のなかで、古典の一分野として間借りを許してもらっているものの、いつ追い出されても不思議ではないというのが実情でなかろうか。

(中略)

いずれ高校で英語や情報など実用的な科目の授業数をさらに補強・確保せんとの話が持ち上がり、国語の授業数が削減される事態になれば、真っ先に漢文が血祭りに差し出されるのではないか。そうなれば、当然のことながら大学入試で漢文を出題するわけにはゆかなくなる。国語教諭免許状を取得すべく漢文の単位を履修する必要もなくなる。かくして、現在ほとんど誰もが無用の長物と見做している漢文は名実ともに消滅、奈良時代末期以来の伝統を誇る漢文訓読も立ち消えの運命にさらされることだろう。

つまり、このままでは漢文が不要とされて、漢文教育も同時に不要となり、消滅を免れないということである。

## 2. 研究の目的と方法

古典教育と漢文教育を取り巻く環境は、現在強い向かい

風にさらされている。しかし、感情的な理由で安易に古典教育と漢文教育を不要と論じてよいのだろうか。

特に、漢文教育の意義や漢文を学ぶ意義についてはまだまだ再考する余地があると考えられる。

本研究は、古典の意義に関する先行研究や古典不要論の実態把握、実地研究にて行なった古典への意識に関する調査結果の分析を行い、そこで見られた課題を汲んだ授業実践を行う。そして、そこで得られた結果をもとに、漢文教育の意義について考察していくものである。

研究の方法としては、以下のように進める。

- ① 古典教育と漢文教育を取り巻く環境について整理する。
- ② 実地研究Ⅰにてアンケート調査を行なう。
- ③ アンケート調査の結果分析を行い、生徒の古典への意識を抽出する。
- ④ 分析結果を踏まえて高等学校第一学年の必修科目「言語文化」の漢文文法の授業を構想する。
- ⑤ 「言語文化」の漢文文法の授業を実践する。
- ⑥ 授業を受けた生徒から意見や感想をもらい、その意見や感想の分析をする。
- ⑦ 分析結果から漢文教育が生徒に与えた影響を考察し、再度漢文教育の意義について捉え直していく。

今回、調査と授業を行ったのは、実地研究Ⅰ(2022年実施)と実地研究Ⅱ(2023年実施)で実習先としてお世話になった県立A高等学校である

## 3. 古典教育と漢文教育の意義の現状

本項では、古典教育と漢文教育の意義について現在の状況を確認していく。なお、今回は古典を学ぶ時間が義務教育段階よりも多い、高等学校を対象とする。また、現在の高等学校学習指導要領において、古典を扱う頻度が高い科目は「言語文化」「古典探究」の二つが存在している。しかし、「古典探究」は選択科目であるため、今回は必修科目である「言語文化」を対象とする。

### 2-1 古典教育の意義について

『高等学校学習指導要領(平成30年度告示)解説国語

編』「言語文化」の説明には以下のような記述がある。

急速なグローバル化が進展するこれからの社会においては、異なる国や文化に属する人々との関わりが日常的になってくる。このような社会にあっては、国際社会に対する理解を深めるとともに、自らのアイデンティティを見極め、我が国の一員としての責任と自覚を深めることが重要であり、先人が築き上げてきた伝統と文化を尊重し、豊かな感性や情緒を養い、我が国の言語文化に対する幅広い知識や教養を活用する資質・能力の育成が必要である。

「言語文化」は、このことを踏まえ、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を置き、全ての生徒に履修させる共通必修科目として新設した。小学校及び中学校国語科と密接に関連し、その内容を発展させ、総合的な言語能力を育成する科目として、選択科目や他の教科・科目等の学習の基盤、とりわけ我が国の言語文化の担い手としての自覚を涵養し、社会人として生涯にわたって生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとしている。

学習指導要領では、①「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める」こと②「我が国の言語文化の担い手としての自覚を涵養し、社会人として生涯にわたって生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身に付ける」ことの二点が古典を学ぶ意義であるとしている。

つまり、古典を学ぶ意義は、受け継がれてきた言語文化を理解し、日本人として生きていくために必要な国語の力を身につけるためであるということができる。

## 2-2 漢文教育の意義について

現行の学習指導要領において、漢文を取り上げているのは、同資料「知識及び技能」(2)我が国の言語文化に関する事項(ア)「我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること」の解説である。

我が国の文化と外国の文化との関係を取り上げているのは、我が国の言語文化の特質を理解するに当たって、中国など外国の文化との関係が重要だからである。我が国は中国の文化の受容を繰り返しつつ独自の文化を築き上げてきた。その経緯を踏まえ、古文と漢文の両方を学ぶことを通して、両文化の関係に気付くことが大切である。古来、我が国は、文字、書物を媒介にして、多くのものを中国から学んだ。その結果、漢語や漢文訓読の文体が、現代においても国語による文章表現の骨格の一つとなっている。漢文を古典として学ぶことの理由はこの点にもある。

(p118)

つまり、漢文を学ぶ意義は、現代文章表現にも脈々と受け

継がれている漢語や漢文訓読を学び、日本の言語文化を理解し、現代日本語の力を向上させることであると言える。

## 2-3 まとめ

学習指導要領では、古典自体を通して言語文化を理解すること、これから生きる学習者に必要な国語の力を育成することが古典教育の意義であるということが出来る。また、漢文教育も同様の意義があるということが出来る。

ここまで、古典教育と漢文教育の意義を見てきたが、その意義に対して古典教育と漢文教育を不要とする意見も存在する。次項では、「古典不要論」に関する議論を参照し、「古典不要論」の意見を確認するとともに、その意見に対応した漢文教育の意義について見ていきたい。

## 3. 古典不要論と対応した漢文の意義について

### 3-1 古典不要論

古典教育と漢文教育については、マイナスイメージが根強くあり、近年ではいわゆる「古典不要論」が議論されるほどである。

では、「古典不要論」とは一体どのようなものなのだろうか。

今回は、『高校に古典は本当に必要なのかー高校生が高校生のために考えたシンポジウムのまとめ』を参考にしていきたい。

本書では、古典肯定派と古典否定派<sup>注2</sup>に分かれて議論を行なっている<sup>注3</sup>。それぞれの意見を確認して、意義と問題点について確認したい。

#### (肯定派の主張)

1. 現代日本語の能力向上
2. 古典を読む過程で、論理的思考を学べる
3. 先人の知恵に学ぶ
4. 国際社会を生きていくには自国の文化を知るべき
5. 文語文に自らアクセスできる
6. 現在の価値観の相対化
7. 古典は日本人の文化的アイデンティティ
8. 古典を批判的に読む

(p75, 79)

#### (否定派に主張)

1. 古典語を言語として使うことはない
2. 古典文学は現代語訳でも読める
3. 古典には高校教育に不適切な内容がある
4. ナショナリズムの助長
5. 現代日本語の向上にはつながらない
6. 古典で論理的な思考は学べない
7. 貴重な時間はもっと実用的なものに当てるべき
8. 情理は現代語訳でも可

## 9. 規定された自国の範囲

(p 77, 81)

肯定派は、言語能力の向上や過去から受け継がれてきた文化の理解など学習指導要領で見られた意義と同様であった。

しかし、否定派は「今役に立つか」という視点に限ったものが多く、「役に立つ」というものも実用的、換言すれば「自身に直接的で可視的な利益になる」というものである。

つまり、「古典不要論」の様相は、古典教育の意義に明示されていない「直接的で可視的な利益」への渴望である。これは、学習指導要領（平成30年告示）第2節「1. 国語科改訂の趣旨及び要点」の科目構成の改善において、「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱」という記述があることから納得できることである。

また、ここでは古典と広い範囲を述べているが、「古典」を「漢文」と言い換えても同様のことが言われるだろう。

### 3-2 古典不要論に対して

ここでは、「古典不要論」を踏まえて、漢文にどのような意義を与えられるのかの先行研究をいくつか見ていきたい。

#### 3-2-1 外国語との関係

古田島 (2022) は、漢文が衰退している理由を戦後の国語改革と環境の改変であるとして、漢文がこれから生き残るための方法について述べている。

古田島は漢文を外国語科と国語科にまたがる科目として位置付け直し、「言語教育としての本然に立ち返ること」で漢文を再生することができると述べている。

具体的には、そもそも古代中国語である漢文を日本では、訓読という方法で日本語に変換をしている。そして、その訓読という方法に着目することで、漢文を「国語科」という枠組みから解放し、新たな枠組みに入れるということである。

この主張は、漢文を学ぶ意義に「外国語を学ぶため」という新たな意義を加えるものである。そのため、「古典不要論」における「自身に直接的で可視的な利益になる」という視点はクリアしているものであると考えられる。

#### 3-2-2 国語科の枠組み

漢文に新たな枠組みを与えることができれば、確かに漢文教育は存続するであろう。しかし、現実的な問題として学習指導要領では、漢文は現代語の力を伸ばすことを目的に授業をしなければならないとされている。

漢文と現代日本語とを関係させることはできないのだろうか。

藤堂明保は『漢語と日本語』において、「漢語文法の原則は、すでに私たちの言語生活の中に浸透している」述べてい

る。ここでの「漢語」とは、二字以上の漢字で構成された熟語のことであり、和語を持つ熟語は含めないものである。

藤堂はその文法に五つの分類を施した。以下に、藤堂の行った五つの分類を載せておく。

- 一. 主述の関係 (地震→地が震う)
- 二. 修飾の関係 (老人→老いた人)
- 三. 並列の関係 (人民→人と民)
- 四. 補足の関係 (成功→功を成す, 乗車→車に乗る, 有名→名が有る)
- 五. 認定の関係 (不正→正しくない)

漢語に漢文文法が使われているという視点は、現代日本語で使われている漢語の意味を理解することにつながる。また、現代日本語の構造に目を向けることにつながっているため、「自身に直接的で可視的な利益になる」という視点に適ったものである。

つまり、漢文文法という要素に目を向けることで、漢文に現代日本語の漢語を学び、理解するという意義を与えることができるということである。

なお、「漢語の構成」は中学校でも学ぶ事項であるが、長谷川 (2022) は中学校内容と高等学校の内容とには齟齬があるとしている。

### 3-3 まとめ

「古典不要論」は、学習指導要領に見られるこれからの生きる学習者に必要な国語の力を育成するという視点でさらに「直接的で可視的な利益」ということができないことから起こったものであるということが出来る。

そこで、漢文に言語教育としての意義を与える方法を見てきたが、学習指導要領上で現代日本語との関係が述べられている以上、急に変更することは難しい。そこで、漢語に目を向けてもらう契機という意義を浮かび上がらせる方法に不要論に対抗する漢文教育の意義があるのではないだろうか。この方法であれば漢文教育と現代日本語とを関係させることができ、現代日本語の力を向上させることにもつながる。

ここまで、指導をする立場から意見を加えてきたが学習指導要領が変わって現在学習をしている生徒たちはどのように古典と漢文を見ているのだろうか。次項では、生徒たちからの生の意見を見ていきたい。

## 4. アンケート調査

前項で、古典教育と漢文教育の意義について確認してきた。では、学ぶ側の生徒は古典についてどのような考えを持っているのだろうか。本項では、筆者が1年次に行なった実地研究でのアンケートから、生徒たちの古典への意識について見ていきたい。

#### 4-1 調査方法

今回は実地研究Ⅰ（2022年実施）にて実習先としてお世話になったA高校の1年生のうち、指導教員が「言語文化」を担当している3クラスの生徒を対象にしている。アンケートは氏名無記入で行なった。対象人数は計69人であるが、無記入の場合もあったため、母数に変動がある。

調査内容としては、古典の意識に関する調査という名前で、古文・漢文それぞれの項目を立ててアンケートを実施した。

アンケートの項目は以下のとおりである。

1. 古文（漢文）についてどう感じているか
2. 1の理由について自由記述
3. 古文（漢文）の学習についてどう感じているか
4. 3の理由について自由記述
5. 古文（漢文）が選択科目となったとしたならば、履修したか

前述の通り古文・漢文それぞれに項目を立てたため、質問は全10個となっている。

1, 2の項目は現在の生徒の古文・漢文という科目への考え方を見るためであり、3, 4は古文・漢文学習への考え方を見るためである。

5は古文・漢文への現在の意欲を見るためのものである。本調査によって、現在、学習者の持つ古典への考え方と意欲について知ることができる。

生徒たちは、アンケート調査を行うまでに、古文では古典文法の用言と助動詞内容を履修しており、漢文については、返り点と訓読、いくつかの句法を履修している。そのため、「古典」に触れた高校生の率直な感想や意見を得ることができる。

なお、5の質問は生徒に古文・漢文への前向きな意欲があるかどうかを確認するためのものであるため、今回は言及しない。

#### 4-2 調査の結果

##### 4-2-1 好き嫌い（選択）

古文に対する好き嫌いであるが、表4-1のような結果となった。

表4-1

古文の好き嫌い	値
好き	3
どちらかという好き	15
普通	20
どちらかという嫌い	25
嫌い	5
総計	68

「好き」や「嫌い」のように大きく偏った意見はそれぞれ少ないものの、「どちらかという嫌い」が「どちらかという

と好き」を超えている。また、「嫌い」が「好き」をわずかながら超えている。

##### 4-2-2 好き嫌い（自由記述）

好き嫌いの理由について生徒たちは貴重な意見を書いてくれた。

好きな理由については以下のような記述があった。

古文の本文内容の面白いから  
テストの点数が取れるから  
今と昔の違いが面白いから

次に、嫌いな感想には以下のような記述があった。

文法事項や単語などの暗記事項の量が多い  
本文内容が難しい  
勉強の仕方がわからない

結果としては、好きな理由も嫌いな理由も古文の内容と文法事項に集約できることがわかる。

##### 4-2-3 得意不得意について（選択）

そして、古文の学習についてであるが、表4-2のようになっている。

表4-2

古文の得意不得意	値
得意	0
どちらかという得意	6
普通	26
どちらかという苦手	25
苦手	11
総計	68

「得意」という項目を挙げたにも拘らず、その項目を選んだ生徒はおらず、逆に「苦手」や「どちらかという苦手」を選んだ生徒が全体の半分を超えている。

##### 4-2-4 得意不得意について（自由記述）

得意不得意の理由は以下のような内容であった。

文法が覚えられない  
現代では使われない、現代語とは意味が違っている言葉が覚えられない  
現代語訳ができない

結果としては「文法」「語彙」「現代語訳」に関する難しさを感じていることがわかった。

#### 4-3 漢文の結果

##### 4-4-1 好き嫌い（選択）

次に、漢文の結果である。まず、漢文の考え方については表4-4を見ていく。

表4-4

漢文の好き嫌い	値
好き	1
どちらかという好き	7
普通	13
どちらかという嫌い	27
嫌い	18
総計	66

「好き」と「どちらかという好き」が全体の12%ほどになっている。しかし、「嫌い」と「どちらかという嫌い」が全体の半分以上を超えている。

#### 4-4-2 好き嫌い (自由記述)

続いて理由については見ていきたい。

好きな理由には、以下のような記述がある。

内容がわかることで楽しいと感じる  
 返り点がパズルのようでおもしろい

嫌いな理由には、以下のような記述が見られた。

返り点がわからない  
 漢字が難しい  
 読み方がわからない  
 やる意味がわからない

好きな理由と嫌いな理由に共通して、「文法」が挙げられる。嫌いな理由に特徴的なものとして、「漢字」「学ぶ意義」に関する言葉が見えた。

#### 4-4-3 得意不得意について (選択)

そして、漢文の学習についてであるが、表4-5を見てみる。

表4-5

漢文の得意不得意	値
得意	0
どちらかという得意	3
普通	14
どちらかという苦手	26
苦手	22
総計	65

こちらにも「得意」という選択肢を選んだ生徒はいなかった。しかし、逆に「苦手」や「どちらかという苦手」とした生徒は約90%いる。

#### 4-4-4 得意不得意について (自由記述)

理由についてだが、以下のような記述が見られた。

漢字がわからない  
 読み方がわからない  
 返り点がわからない  
 現代語訳が難しい

「漢字」、「読み」、「返り点」、「読み方」などの難しさについて多くの記述が見られた。

#### 4-3 分析

##### 4-4-1 古文の分析

古文に関してだが、嫌いであるという生徒は多いながらも少なからず好きでいる生徒はいるようである。

好きな生徒の根拠として多いのは、本文の内容や今と昔の違いの部分に楽しさを見出していることである。

反対に嫌いな生徒の根拠としては、文法事項自体の難しさや暗記の難しさ、学習方法がわからないこと、内容の難解さが挙げられている。

上記から、内容の好き嫌いには個人差が見られることがわかる。また、文法事項に苦手を抱える生徒が多いこともわかった。

この結果の分析から、着手可能な古文の課題は、①文法事項の理解、②適切な学習方法の指導二つにまとめることができる

##### 4-4-2 漢文の分析

まず、好きな生徒は全体の中でも少ない方になっており、嫌いな生徒が約70%、苦手な生徒が約90%という結果となっている。

好きな生徒の根拠としては、内容がおもしろいや返り点がパズルのようで楽しいとのことである。

嫌いな生徒の根拠としては、返り点がわからない、訓読がわからない、漢字がわからない、読み方がわからない、やる意味がわからないのようなものが挙げられた。

この結果から、漢文における課題は、訓読方法などの文法事項読み方、漢字学習、漢文の学ぶ意義が挙げられる。

内容に関する好き嫌いや文法事項については、古文と共通している。しかし、注目すべきは、学ぶ意義が無いとする意見である。

意義を問う回答は、古文にはなく、漢文の質問のみに書かれていた。また、別の生徒の記述として「現代中国語の方がこれからのためになるから、漢文をやる意味がわからない」(一部改編)という漢文教育の根幹を揺るがすような言葉が見られた。しかし、漢文の意義を問うような回答は、古田島の主張を受ければ妥当な意見だということができる。

以上を踏まえると、古典全体の課題として、文法に関する課題、読み方に関する課題が挙げられる。また、今回、漢文のみでしか意義に関する課題は出なかったが、古文におい

ても意義の問題は出てくることが予想される。

#### 4-4 まとめ

以上、少ない範囲ではあるが実際の高校生の意見を見てきた。やはり、古文も漢文も生徒たちから好かれてはいないようである。

さらに、漢文に関しては高校生1年生の段階で既に学ぶ意義がわからないといった意見が出てしまっている。

そのような気持ちを払拭しないままに進んでしまえば、世の中での漢文への不要論、さらには「古典不要論」がさらに大きくなってしまう。

以上を鑑みて、「直接的で可視的な利益」という視点を踏まえた漢文を学ぶ意義<sup>注4</sup>を明確にする必要はあると考えられる。

次項では、「直接的で可視的な利益」という視点を踏まえた授業について構想していく。

### 5. 授業の構想と実践

#### 5-1 授業の目的

本授業の目的は、日常的に使用している熟語には漢文文法が使用されているということを理解してもらうことである。そして、日常的な部分に漢文文法が使用されているという視点から、ことばについて考え、理解していく基礎を作ることができると考えられる。

#### 5-2 授業の構想

アンケート調査の結果を踏まえると、文法事項における丁寧な説明が欲しいこと、学ぶ意義が伝わるものが求められている。

また、指導頂いた先生が行なったアンケートによれば、グループワークを入れて欲しいという意見が多かった。

なお、今回「漢語」とは、二字以上の漢字で構成された所謂「熟語」のようなものを指す。

科目は「言語文化」で、教科書は数研出版の「言語文化」p136～143を使用し、全2時間構成である。

実地研究での指導をしてくださった先生からは、漢文訓読と再読文字、「不」「非」「無」について扱って欲しいという要望を受けている。

今回構想した授業は、埼玉大学名誉教授薄井俊二先生が行なっていた授業を参考にしている。

#### 5-3 授業対象について

授業を実践したのは、実地研究Ⅱ（2023年実施）にてお世話になったA高校の1年生である。対象クラスは実地研究Ⅱにて指導頂いた先生が授業を持っているクラス三つ（クラス①、クラス②、クラス③）であり、クラス①は25人、クラス②は24人、クラス③は23人の計72人である。なお、公欠等もあり、2時間分全てを受けられていない生徒も数名いる。

#### 5-3 授業内容について

##### 5-3-1 1時限目の概要

1時限目は以下のような流れで授業を行なった。

表5-1

	主な学習活動
導入 (10分)	1. 「漢文」について 2. グループワーク① (熟語作成) 3. グループワーク② (熟語の意味)
展開 (37分)	1. 熟語構成について (返り点と熟語構成の関係に関する説明) 2. 返り点の復習(レ点及び一、二点) 3. 置き字の説明 4. 上中下点の説明 5. 書き下しの練習
終末 (3分)	1. 次回の内容についての説明

##### 5-3-2 2時限目の概要

2時限目は以下のような流れで授業を行なった。

表5-2

	主な学習活動
導入 (10分)	1. 置き字の復習 2. 訓読の復習
展開 (35分)	1. 「不」「非」「無」の説明 2. 再読文字の説明(熟語の構成を再度確認しながら) 3. 書き下しの練習
終末 (5分)	1. 学習内容のまとめ

#### 5-4-3 漢語構成と漢文文法との関係に関する活動

##### 5-4-3-1 1時限目

まず4～5人でグループを作ってもらい、以下のような



プリントを渡し、「そこにある漢字全てを使って、二字熟語を七個作ってください」と伝えた。

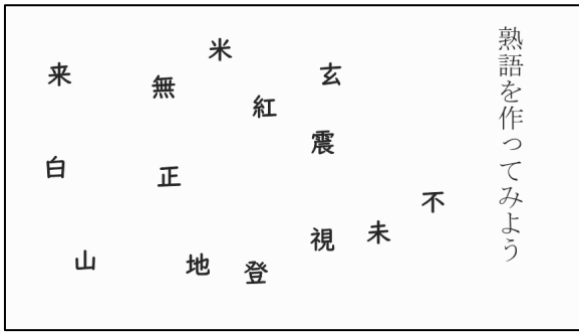


図5-1

熟語を作ってもらおうと、スライドで答えを示し、「その漢字の意味はどのようなものか」ということをプリントに書き入れてもらった。

そして、答えとして以下のプリントを渡し、「地震」と「登山」を例に出し、「登山は山に登るなのに、なぜ山登と書かないのか」という発問を投げかけた。

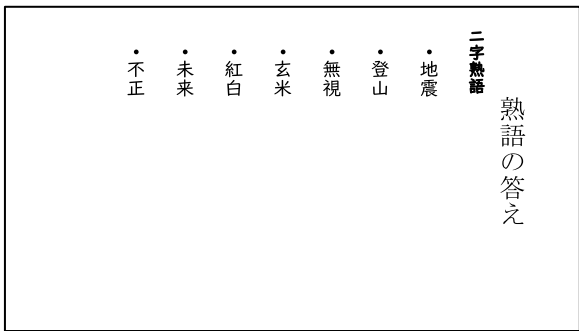


図5-2

多くの生徒が不思議な顔をする中、あるクラスの生徒は、「レ点が入るからだ」と述べた。そこから、以下のスライドを示し、訓読の返点は漢語の構成の一つである「補足の構造」注5と関係していることを示した。

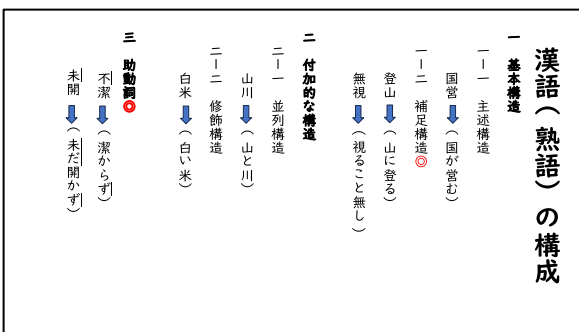


図5-3

### 5-4-3-2 2時限目

2時限目は、「不」「非」「無」と再読文字について多くの時間を割いた。また、両方とも漢語の構成で説明を行なった。

以下は、「不」「非」「無」を説明するために使用したス

ライドである。

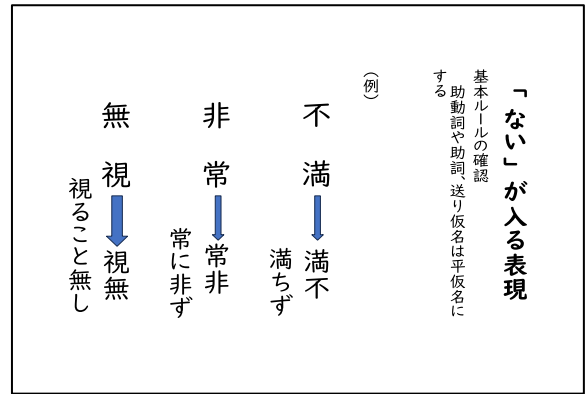


図5-4

ここでは、語順を意味の形に直してから書き下している。こうすることで、既に説明した漢語の構成との関係を踏まえて「不」「非」「無」の内容を理解することができる。再読文字に関するスライドである。

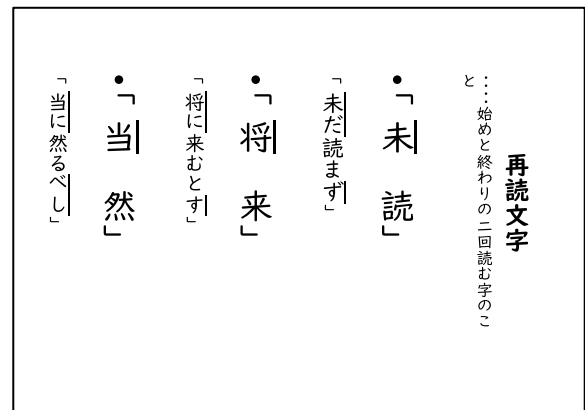


図5-5

説明の際に、「未読」の意味を確認し、横に「まだ読んでいない」と書いてから、漢字と対応させた。「未」を「まだ」と対応させ、「読」を「読む」と対応させると「ない」に対応する漢字がなくなってしまう。「未」に「ない」の意味があることがわかった時点で、「未」は二度読むという再読文字の性質を見つけることにつながった。

### 5-4 結果と分析

授業効果を見るために、授業後に生徒へアンケート(記述式)を書いてもらった。質問事項としては、授業で分かったことや感想を聞いたものである。

多く見られた感想としては、「授業で返り点がわかった」「再読文字が難しい」「テストまでに覚える」のようなものであった。このような感想となった要因としては、授業の時間で生徒が手を動かした時間の多くを書き下しに割いてしまったことである。また、テストについても少しずつ話が出ていたことも挙げられる。

しかし、中には「日本語と近いと感じた」という意見や「今使っている言葉と同じところがあって驚いた」といった意

見が全体で10人(7.2%)ほどあった。

このような意見から、わずかではあるが身近なところに漢文文法が隠れているという視点を生徒に伝えることができたと考えられる。

また、実地研究中に中間テストがあり、今回の授業範囲の内容も試験問題に扱われていた。その回答についても確認することができたため、目視の範囲ではあるが、見られた結果の分析も行う。

生徒の回答を見ていると、目についたこととしては再読文字の内容である。再読文字の問題で多いミスは、再読文字であるにもかかわらず、文頭もしくは文末のどちらかしか読まないものである。しかし、本授業を行なった生徒でそのようなミスは2件ほどにとどまっていた。そのため、再読文字の訓読にイメージを与える点において大いに効果があったことがわかる。

今回は短い時間での授業となってしまうため、全ての構造を網羅できているわけではない。しかし、生徒たちは日常で漢語を目にした際に、意味を漢文文法から推測したり、意味を見てなぜそのような意味になるのかということを考えたりできるようになる。そうなれば、現代日本語の力を育み、向上させることにつながる。

## 6. まとめと課題

古典教育と漢文教育への風当たりは年々強くなり、不要論についても同様に強くなってきている。

古典教育と漢文教育の意義は、これまで培われてきた言語文化の理解とこれから生きるために必要な現代日本語の力の育成である。しかし、「直接的で可視的な利益」を踏まえた視点を踏まえた意義を論じないことには不要論の流れは食い止められない。実際に学習をしている生徒からも学ぶ意義を問う意見が出ていることから、学習による「直接的で可視的な利益」を提示することの重要性は高いことが伺える。

そこで、現代日本語の向上という目的を持って、藤堂の示した漢語の構成と薄井俊二氏が行なった授業を参考にした漢語の構成を起点とした漢文文法の授業を構想し、実践した。

その結果、生徒に漢文文法と日常的な現代日本語との関係という新たな視点を得るきっかけを作ることができた。また、再読文字の理解に良い影響を及ぼした。そこから、その視点を持つことができれば、現代日本語の力を育成することにつながることもわかった。これは、「古典不要論」の「直接的で可視的な利益」に適うものでもある。

以上より、漢文教育は漢文の学習を通じて「現代日本語の力を育成し、向上させることができる」という意義があるということが出来る。

しかし、今回は時間の都合上、漢語の構成からはじめた生徒とそうでない生徒との差を見とることができなかった。また、漢語の構成全てを扱ったわけでもない。そのため、そ

これらの条件が与える影響についての考察は今後の課題としていきたい。

注1：今回「古典」の語は、『国語科指導用語辞典』123「古典」(p137)における定義を参考にし、古文と漢文の両方を指すものとする。また、今回は漢文のみを問題にするため、「古典教育」と並立して「漢文教育」を置く。

注2：「古典否定派」はディスカッションにおいて「高校の授業で古典を学ぶことには意義がない」とする側の名称である。「古典不要論」は古典を学校で学ぶ必要がないとするものであるため、今回は同じものとして捉える。

注3：議論の前提として、以下のようなものが設定されている。

「古典」は日本で古くから読み継がれてきた作品

「授業」は古典を原文で読むもの

「必修・選択」という言葉は使わない

「意義がある」とは当人や社会に対してポジティブな効果があること

「論理」は与えられた前提から結論を導き出す推論の過程、

肯定派は「原文で読む」ことを絶対として、否定派は「原文を読む」ことには確実に反対

注4：漢文を学ぶ意義を問う質問があったことは事実である。しかし、一方で何ができれば「ためになる」や「意味がある」ということができるのかという疑問も生まれる。

この疑問については資料やデータが足りないため、本論では触れない。

注5：この分類は、藤堂の分類を参考にしたものであり、『漢語と日本語』では「認定の関係」となっていたところを薄井俊二氏は「助動詞」と変更している。

## 参考・引用文献

- 古田島洋介著 2022年3月11日「漢文教育の凋落-漢文の立場から見た戦後の国語改革-」『戦後教育史研究第35号(終刊号)』第49頁～第64頁 明星大学戦後教育史研究センター
- 高木まさき, 寺井正憲, 中村敦雄, 山元隆春著 2015年7月 『国語科指導用語辞典』明治図書
- 藤堂明保著 1969年5月10日『漢語と日本語』株式会社秀英出版
- 長谷川真史著 2022年12月25日「新学習指導要領における高等学校国語科教科書「言語文化」の漢文教材について:漢語表現の構造の観点から」『中国文学論集』51号第113頁～第129頁 九州大学中国文学会
- 長谷川凜, 丹野健, 内田花, 田中美桜, 中村海人, 神山結衣, 小林未来, 牧野かれん, 仲島ひとみ編 2021年5月25日『高校に古典は本当に必要なか-高校生が高校生のために考えたシンポジウムのまとめ-』株式会社文学通信
- 山崎桂子, 山崎誠著 2017年1月30日「瀕死の漢文訓読」『志学館大学人間関係学部研究紀要38号』第133頁～第152頁 志学館大学
- 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年度告示)解説国語編』